

第19回AAF戯曲賞 審査会レポート

一次審査会 9月5日

二次審査会 11月6日



審査員(写真左から)

白神ももこ(演出家・振付家・ダンサー、モモンガ・コンプレックス主宰)

鳴海康平(演出家、「第七劇場」代表)

三浦基(演出家、「地点」代表)

やなぎみわ(アーティスト)

進行 山本麦子(愛知県芸術劇場)

会場 (一次審査)愛知芸術文化センター アートスペースB

(二次審査)京都芸術センター ミーティングルーム2

※一次審査は白神ももこは台風のため来名できずビデオチャットで参加

去る9月5日、11月6日に第19回AAF戯曲賞一次審査会、二次審査会が行われました。今回は国内外から136作品のご応募をいただき、審査にあたり審査員全員が全作品を読んだ上で議論が行われました。

本来非公開の会議ではありますが、審査員の皆様に了承を得まして一部を抜粋してお伝えします。(編集している部分があることをご了承ください)

一次審査会(9月5日)

進行 それでは第19回AAF戯曲賞の審査を行います。昨日の台風の影響で新幹線が止まり白神ももこさんが名古屋に来られなくなってしまったのですが、インターネットで中継を繋ぎながら進めて行きたいと思います。今年は136作品の応募がありました。まずは全体を読んでみての所感をお伺いして審査の議論に入っていきたいと思います。

やなぎみわ(以下やなぎ) 今年は去年に比べて男性の応募者が増えた気がします。ただ、戯曲を書いているのに、純文学、というより文学そのものの影響が薄い。文学を読んでいるという印象が薄いのです。ライトノベル、アニメを見て書いているのではないか、と思ってしまう。小劇場の中のコードで完結している作品もあります。ただ今年は、ウェブ上の投稿小説や、アニメの中のコードの中で完結している・閉じていると感じることが多かった。勿論その中で良い物もあるけど、年代を超えて全体を覆う雰囲気として、テキストに閉塞を感じました。

鳴海康平(以下鳴海) 全体としてはテレビドラマなどの映像向きの物語が多い印象がありました。(AAF戯曲賞のテーマである)「戯曲とは何か」の中だと霞んでしまう「物語の良さ」に訴えた作品が多かった。バリエーションとしての物語で「戯曲とは何か」という根本的な問いに答えている作品は多くはなかったですね。あと、メタ演劇っぽい作品も多くなった印象です。

三浦基(以下三浦) 台詞を「」カギ括弧で書く人が多い。高校演劇とか大学の演劇部からの応募者はさすがに「」を書かない。書き手が戯曲を読んでいない、小説を読んでいないのではないかな。文学・哲学と戦わない、かといって全く違う文脈を持ってくるわけでもなく、シナリオ・テレビドラマを参照しているような印象を受ける。「当たり前」とされることを分らないままでも

戦えると思っている節がある。所謂‘戯曲の規定’通りに書くべき、ということではなくて、規定が分からなくても少しでも勉強したり戯曲を読んでもみたら分かることが分かっていない。去年のレポートも読んでない、ノミネート戯曲も読んでないんじゃないか、と、暖簾に腕押しのような気がしてしまう。

白神ももこ(以下白神) みなさんと印象は似ています。あと、ファンタジーが多くて、名前の把握がしづらい、その略名は必要だろうか?という作品もあって、読みづらい印象がありました。

鳴海 思ったより‘普通’の戯曲が多いな、という印象。あ、もちろん、面白い作品もありました。チャレンジしている作品を選びたいと思っているんですけど、チャレンジの仕方自体が焼き直しの場合も多くて、根本的な部分にチャレンジしようとしている作品が少ない。概要では面白いと思えても、テキストを読んでもと反映されていなくて、頭の中でそのチャレンジが補完されているのでは、という感じもありますね…

やなぎ 好みとしては上演されて、こなれちゃったものにあまり興味が無い。だから変なものを選びがち(笑)ただし、それは、規則破りとは関係ないです。書式を整えて送るなどは常識としてやるべきことです。手書きでも読みやすいものはありますが。

鳴海 原稿用紙のように成形されたテキストは読みにくいですね。
(一同賛同)

やなぎ 文筆に関わる人は、自分の作る書式、文体などに対して、誰よりも意識が高いのが当然です。

進行 AAF戯曲賞では‘戯曲とは何か?’とテーマを変えた時に、応募の形式もA4に印刷できれば問わないということにしたという経緯があります。確かに原稿用紙やレポート用紙に手書きの作品があれば、表紙やレイアウトに凝った作品や、上演記録の写真を付けての応募など、応募形式は広がっていると思います。

鳴海 当初は‘提出形式にも作家側の意図があるかもしれない’ということで細かい規定をしていなかったですが…意図せず読みにくいものが増えてきている気がしますね。それから今年のお応募者にはペンネーム増えました。流行りなんですか?ライトノベルとかネット漫画とかの影響ですかね。

三浦 漫画の影響じゃない?

鳴海 10代、若い子からの応募が増えたからかな。タイムトラベルやタイムリープ・死・未来・生き返り、というモチーフが多かったですね。

やなぎ ウェブ小説が、すぐにアニメになる、みたいな手頃さが感じられて…その辺りのつくりが甘い作品が多い。最近は、アニメとかのメディアでも筋の通った話が崩壊してぐちゃぐちゃになっている、そういう感じ。

進行 気になった作品はいかがでしょうか。

やなぎ まずは大竹竜平さんの『遠心』。ルールが単純なのでやってみないと面白いか分からないけど、気にはなった。

鳴海 声に出してみると、促音とか(の音のルールの定義が)曖昧だなと。舞台上での距離感も単純な論理性。演出家としては、舞台上の遠近は言葉や身体の物理性だけで表現するわけではないので、その論理性が単純ゆえに排他的に感じます。

やなぎ 文字数だけでは時間は計れないことは、実際にやったら気づきそうですね。

鳴海 野心は強く感じます。

鳴海 ほかに『Vanilla』が気になりました。頭でっかちになりがちなモチーフを分かりやすく描こうとしている所が好印象を持ちました。愛の事とか。それから『おぼれる夢のウミガメ……あるいは、おぼれる劇作家のウミガメの夢……』も気になりましたね。

三浦 『Vanilla』ね。これけっこう、(フェルナンド)アラバールっぽいかなと思って。最後が悲しくて、ちょっとグロテスクな面もあるし…これなら上演できそうかな。

鳴海 ジュネとかアラバールとかっぽいのは分かります。

やなぎ 『おぼれる夢のウミガメ……あるいは、おぼれる劇作家のウミガメの夢……』はどうでした?

三浦 しっかりしているなどは思った。夢という設定がひっかかる。

鳴海 刺激的に書けているんですけど、‘在日’と‘天皇’という言葉の扱いに安易な印象があって、こういう背景が重い言葉を使うならもっと突っ込んで欲しいな、と。

三浦 ちょっと古い感じがあった。まともに書いた人はまともに、コンセプチュアルな作品を作っている人はコンセプトで逃げずに戦わないと。枠組みを外すとコントとかでしっかりかけている物の方が目立っちゃうというのは問題。

やなぎ そういふ点では『象徴の詩人』はしっかり書いている。若いけど勉強してる。ちゃんと勉強する人は大事にしたい。

鳴海 ただ、すごい引用が多いんですね…。

三浦 『象徴の詩人』は僕も良いなと思っていた。

白神 『停留所』。もうちょっと時間をかけて読みたい、と思わされた。

鳴海 『停留所』の別役(実)さんの作品を下敷きにしつつ、換骨奪胎しようという気持ちはよく伝わってきます。

以上のような議論を経て、下記18作品が一次審査通過作品となりました。

異聞・シーシュポスの神話(平賀美咲)

入墨淘汰(野滝希)

うまく落ちる練習(三野新)

液晶線(川津望+月読彦)

遠心(大竹竜平)

「おぼれる夢のウミガメ……あるいは、おぼれる劇作家のウミガメの夢……」(広島友好)

オリンピック・クインテット(阿賀圭祐)

かる～いふとん(七年佳音)

幾何学模様に、ガールズエンド(かやもりりょう)

Qu'est-ce que c'est que moi?(岡本昌也)

象徴の詩人(神田真直)

すべては原子で満ちている
(荒木知佳、小野彩加、古賀友樹、近藤千紘、高嶋袖衣、瀧腰教寛、中澤陽、西井裕美)

壮年、私事を語りて之を遺す(楠毅一朗)

停留所(塩田将也)

ねー(小野晃太郎)

のんちゃん、旅に出る(水谷真利子)

Vanilla(こさべあきひろ)

「ヤクタタズ！」II 一序章一(フルカワトシマサ's)

二次審査会(11月6日)

司会 それでは、第19回AAF戯曲賞の二次審査会を始めます。前回の一次審査で18作品通過しました。二次審査通過の作品数に指定はありませんが、3~5作品くらいまでに絞りたいと考えております。まずは一作品ずつ話し合っていきたいと思います。

『遠心』

やなぎ 2人くらいで実際に声を出して読んでみたんだけど、やはりテキスト量の変化は、あまりわからなかった…

白神 やって見たんですね！

三浦 ルールがわからないよね。頭でっかちな感はあるが意外と面白く読んだ。緊張感を構成したい、という抑圧があるのではと思った。

やなぎ 楽器を使って試すくらいの挑戦が必要では。

三浦 ルールを離れて、文体としては面白い。だがちょっと抽象的すぎてラストが弱い。

鳴海 言葉を重ねることで言いたいことから遠ざかるという点は面白いですね。テキストに記されている音とルール付けだけでそれが出来るか、というそういうわけではないと思います…

やなぎ 他の作品もだけど、自分のルールに縛られ過ぎた作品が多いですね。

三浦 ルールを設定して書くという事は評価している。ただ、ルールを使って書く、というからにはどこかでルールを破らないと。

白神 どうやって上演したら面白くなるか、(劇団)地点が上演したらどうなるんだろう…とかも考えた。

鳴海 (戯曲と上演について)審査ではいつも話題になるんですよね。どこまでがテキストの力で、どこからが演出の力なのかという話。

やなぎ このテキストにどう上演したら面白いかを考えさせる力があることは確かですね。

白神 ちょっと‘遊び’が足りない感じはある。

やなぎ 壊し甲斐があるテキスト、ともいえる。

『Vanilla』

やなぎ 父と娘、良くできている。

三浦 日常的でないフィクションに飛躍しながら会話を展開していて完成度が高い。でも物語を書くならもう少し踏み込んだ、ダークな部分も書いて欲しいと思う。

鳴海 物語としては易くできているんだけど、伝統的で記号的なモチーフを多用している分、良くできた消費されやすい物語の範疇とも言ってしまうのが惜しいですね。

白神 さらっと読めちゃう。世界を限定し過ぎちゃっているかなという感じ。

やなぎ まだ若いのに手慣れた感があるのが残念。

三浦 ‘読みやすい’というのは評価したいという気持ちもある、皮肉にもなるけど…。もう少し踏み込んでほしかった。愛について言及しているなら、愛について考えさせて欲しい。アラバールだったら単純な会話が続いていても背景に政治的なことが横たわっていて「ままごとではないんだな」と思わせる何かがある。日本でこれを書くなら、「少女漫画の方がもっと鋭いのでは」と思ってしまう。頑張ってる部分。

やなぎ 回想部分の配役替えとかも上手いし、きつと上演しやすい。あくまで上演の範疇で書かれた戯曲、ということですね。

『のんちゃん、旅に出る』

鳴海 良い物語で、オハナシとしてとてもよく書かれていると思います。人物も多様で個性があって舞台上が華やか。過去を振り返ることによって現在が違って見える・見つめなおすという方法、いわゆるレトロスペクティブテクニクも効いている。その代わりに、どこかで読んだことがありそうな物語、記号的な物語の範疇に留まっています。

やなぎ NHKでドラマ化できそうな。

白神 最後がちょっと簡単に心が動いてる。

三浦 まさにシナリオ的な感じ、というのに尽きる。物語はそれなりにうまくできているんだけど、日常会話の域を出ない。

やなぎ そこがなんか息苦しい感じがする…

三浦 「あざしたー」みたいな台詞があって、作者が何かを意図して書いている部分だけどキャラクターの域を出ていない。物語はそれなりに面白い…どこかで破綻していたらもっと面白い。

これだとテレビドラマとかの枠におさまっちゃう。戯曲だったら‘なぜ舞台上演するのか’と
考えないといけない。

やなぎ ‘木造の一軒家の仏間’という場所の力がね。圧がありますよ。いったん頭に描くともうその仏
間のイメージが強固で。

鳴海 確かに。そこからはみ出せていないのが残念ですね…。

『おぼれる夢のウミガメ ……あるいは、おぼれる劇作家のウミガメの夢……』

鳴海 夢という構造と、モノログが中心にある作品。あまり綺麗に整理しきれていないという部分、
飛躍があることは魅力的でしたが、展開が場当たりの感は否めない。それが夢ではある
けど、劇を推進するためのご都合主義にも見えることがもったいない。もう少し劇構造として
有機性を感じられると、ドラマツルギーの強度が増したように思います。色彩感覚も感じら
れるのですが、限定的で薄いのが惜しいと感じました。

三浦 読みやすかった。何が書いてあるかを想像しながら読めた。作者が完成された世界を
持っている感じがした。夢落ちがよくあるので、もう2、3個カオティックなものを詰め込まない
と。詩的な要素があれば少しは評価できるんだけど…。

やなぎ ラストシーンの喰われている周りをウミガメが回っているというシーンが書きたかったんだろ
うな、というのは伝わってきた。

白神 直接的に言葉で書かれすぎている気がして…(台詞を)発する人にすごい負荷というか、
負わなくて良い責任が出てきてしまうのではないかとも思う。‘声に出す’ということに対して
の重さを考えてしまう。‘美しさ’はあるんだけど、そこに飛ばさないで終わっている。

鳴海 ヒカリゴケを思い出すようなシーンもありましたね。信念・想いみたいなものが言葉になって
いるんですが、それが多すぎて窮屈な印象も受けます。

『オリピック・インテット』

鳴海 発想、コンセプトはとも面白いと思いました。事実と、史実として表れていないものへの想
像力、現代の私たちがどうやって文字にしたり表現したりするのか、その倫理観についてい
ろんな問いを示そうとしていますよね。ただ、会話が説明的でパターンが決まってい
一方が言葉として表現したいことを説明する、片方がうながす、という役割が決まってい
て、叙事的な会話が多いというのがもったいない。所謂‘書かれたもの’が動かしにくい事実で、
それに隠されてしまうものを表現として掘り起こそうというコンセプトだと思いますが、このテ
キストでは、創造力で広げるというよりもテキストで規定しているような印象が強い…それを
自覚的に、問題提起として記すというメタ性は感じられなかったです。

三浦 ‘問答’の域を出ていない気がする。コンセプトは面白いんだけど、台詞自体が広がらない
というか、身体性がない。読み物として読むという域を出ていない気がします。着眼点は面
白い。

やなぎ 戯曲にするには言葉、身体性が弱い。歴史に対するアプローチについて書かれている部
分(概要)はとっても良いんだけど、本編に入ると解説を読んでいるような。

白神 着眼点は面白いな。全部オリピックについてで、(時間軸を)戻ったり飛ばしたりしてい
るんだけど、読みづらい。人が動いて何かが立ち現れる、というような感じがなくて、これ
だったら歴史の文章を読んだほうが分かりやすいのではと思ってしまう。レクチャーパフォー
マンス、みたいなものならイメージできる。

鳴海 プレゼンテーションみたいなんですね…

やなぎ 「オリピックの解説員」みたいなシチュエーションだったら分かる。

『異聞・シーシュポスの神話』

鳴海 シーシュポスはギリシャ神話の神、『シーシュポスの神話』というエッセイは、カミュが書いて
いますね。

三浦 概要で面白いこと言ってる。良い意味で読みやすい。若いのにすごいな。

やなぎ なかなか未恐ろしい！

三浦 もう少し長く書いてほしかったなあ。

鳴海 前半に出てくる材料が膨らむ前に結末になってしまふ。群像劇のように広がりそうなのに、そ
の前に結末にむかってしまふって単線的にまとまってしまふってありますね。しかしシーシュポスと
いうモチーフに目を向けていること、それをテキストに表現として置き換えていることは好印
象でした。

三浦 あるレベル以上の抽象化ができているのはすごいよね

白神 難点としてはせつかく出てきた人が機能していない感じはしている。エピソードが一人一人
あるだろうし、場を動かすこともできるだろうに、出てきて会話しただけ、になってしまふ

いる。もう少し何かあったら…と思うんだけど。でも未来っぽい感じもして、面白かった。

「ヤクタタズ！」II 一序章一

鳴海 作者のフルカワさんが持っているパッション、ポエティックな部分、彼だから発見できる・気づける部分が良く出ていると思います。惜しいのは半分近く引用であること。『春琴抄』『鏡地獄』の翻案上演としてなら観てみたいと思うのですが、オリジナルのテキストとしては評価は難しいと思う。2作品にフルカワさんが共感したことはよく理解できます。

やなぎ 昨年よりも耽美的な感じになりましたね。

三浦 相変わらず、文体のしつこさはある。全体の構造からすると、改題するなら引用しているテキストをもっとやるのか、ただの引用なのか、の態度が決まらなかったのかな…という気もする。

やなぎ 引用する、のっかるというのは大事なことです。先人に乗っかって、いつか乗り越えていくことで作品が強化されます。でも(この作品は)まだ未消化な感じがするんですね。

白神 どこが引用なのか、読んでるときにはすぐには分からない箇所もあるので「いきなりいかめしい言葉がきた！」という独特の感覚だった。

『かる〜いふとん』

白神 意外と好きでした。

三浦 シーンのタイトルとか、センスはあると思いました。方向性として面白い。良い意味でのコントとして。ただ、何せ短い。これがもっと畳みかけていく感じだったら面白いと思う。

やなぎ 最近よくYou Tubeで見えるような寸劇調の、短くて面白い、脱力系の短い会話が続いていく感じで、閉塞感はないです。ただ、タイトルの「軽い布団」、重量がない凶器という布団、というのはセンスがある。

三浦 この入射角で切り込むチャンスはあると思う。超えて欲しい。

やなぎ 何かに繋がりそうところで、必ず切れてしまう。

鳴海 言葉もライトで、テンポもよく、会話のセンス良い。コントが積み重なることで長編になる構造もよくできています。これが展開されて軸が2本3本になって、という期待を持ちました。ライトな感覚で、しかし、自分が報われないということ表現しようとしている。笑い飛ばしつつ、絶望までも行かない、マイルドな悲観みたいなニュアンスが伝わってきます。ライトもしくはコントというスタイルのために深く描かないのはもったいない。それにしても、幸せな人が一人もいない、というのは現代的で共感します。

やなぎ (登場人物が)みんな報われないね。

白神 チクチク刺してくる感じは好きだなあ。

『壮年、私事を語りて之を遺す』

やなぎ これまでとは違うタイプの元気に自閉した‘おじいちゃんの自伝’…かな。戯曲と言うより講談など、芸能の領域で演ったら良いのでは。

鳴海 五七調というルールを課して書いていることは挑戦的ですね。個人の人生とか反省は、その人固有の物なのでドラマチックではある。しかしドラマチックではあるが、他者に向けて展開されているものではない。レーゼドラマ(読むための戯曲)として‘こういう人がいた’という意味では興味深いんですが、上演するためのテキストやドラマとして考えると弱さは否めない。(作品中に出てくる)カセットデッキはベケットの『クラブ最後のテープ』ですよ。録音という構造は面白いんですが、このテキスト上では広がり薄い。

白神 おっぺけペー節的な、ユニークさを感じた。

三浦 ユニークだとは思。ドラマ的にはこれでは芝居にならない。構造の問題を考えてなさすぎるので、それ以下でも以上でもない。「独り言で」と言い切っているが、世界観があるかという、そこが良く分からない。

鳴海 これだけの言葉を使えることはすごいことです。とはいえ、七五調だけで45分、50分パフォーマンスするのは大変ですね。

『幾何学模様に、ガールズエンド』

鳴海 これだけの分量を書いている点では体力もあるし、発想も豊かだと思いました。物語の構造・組み立て方も上手い。アニメーション化できるような作品で演劇の間口を広げたい思いは何も間違っていないんですけど、‘簡単に流通させられるテキスト’は‘簡単に消費されるテキスト’でもある。その部分に批判的な態度は感じられず、流通・消費が目的だと、この戯曲賞としては評価しにくいのが率直な印象です。

その目的に対応して、後半、謎解きがすべて言葉で語られていてセオリー通り。定型にのっつてとても上手く書いているけど、どこかで読んだ印象が拭えない。

三浦 物語や伏線の張り方はOK。ただ、展開だけで見せたいのかなという感じで、台詞自体がまだ文体を伴っていないのが残念なところ。意外と読むのが大変だった。物語ってそういうものなんだよな…。

白神 ツボが分からなかった。ゲーム慣れしてないからかもしれないけど。とっかかりが無いまま終わってしまった。

やなぎ ゲームのルールみたいなものにも固執していて、それに引っかけられないと阻害される。アニメーション的で、読みやすい人には読みやすい、はまる人ははまるんだと思う。作者にとっては(この書き方が)至極身近だったので、こういう形で書いたのではないのでしょうか。最初に書いてあるように、このスタイルが「演劇人口を増やす」という目的ならば、「コンビニで売れる」を目的とした美術作品と同じですが、マーケット批判や資本主義批判をしたいのか、よく分からない。消費される物をわざわざ演劇にする必要があるのかな？

白神 この10年くらいでメディアがすごく変わったわったんだろうな、という感じは受けた。置いていかれてるのかもなあ…

鳴海 ゲームのルールに則って進むという構造は昔からありますが、『楽屋』(清水邦夫)とかとは全く違う扱い方ですね。

やなぎ キャラクター設定がアニメみたい。20代の学生が「会話のキャッチボールは、ユーチューブで学んで、ソツなくこなしている」と言っていました。コミュニケーションのマニュアルがインターネットで学ぶというような諦観がある。既存のキャラクターで自他ともに囲いこみ、それぞれマニュアル通りにキャラを演じるというような。

鳴海 ‘パラメーターによるキャラ設定’があるとして、そこから抜け出る、もしくはそれに対する態度を表明しているとは思いませんし、作者もこのテキストではその必要性は感じていないと思います、良い悪いは別にして。ただ、それに対して態度・アンサーみたいなものが表現されていれば面白いと思うのですが。

『液晶線』

三浦 勢いがあったよかった。すごいテンションが伝わってくる。ただ、勢いは良いんだけど…テーマがもう少しあってもよかったのかなと。グロテスクなテーマを扱っていても「もう分かった」という感じが拭えなかった。

やなぎ 読むのがつらかった。

鳴海 抽象的でポエティック、挑戦的に作ったというのは好感が持てます。詩の部分だけでなく、台詞の部分の言葉にも面白さがありました。ただ、物語を拒否したりはぐらかすこと自体が目的になってしまっている印象があり、それでは読み手がテキストに込められた挑戦にも寄り添いにくいし、思いをはせることもしにくいと感じます。

やなぎ それはテキスト？

鳴海 そう。読み手が、テキストの意志や意図がわからなくなるような言葉のずらしが続きますよね。ポエティックともいえるかもしれませんが、詩的操作というよりも恣意性の方を強く感じてしまいました。

白神 読んでいるときにリズムを崩される感じが、最初は面白いと思ったんだけど…。でも、真面目さも感じる。

やなぎ 誠実だとは思う。

三浦 詩が挿入されていて、詩の部分が良いなと思った。台詞って難しい。構造的には演劇的じゃないんだけど詩が入ってくるのはどういうことなのかがもう少し明確に見えれば評価できる。もう少し全体のイメージを押し出して欲しい。短いとは思わなかった。

やなぎ 詩の部分と、台詞の部分とが対話にあまりになっていないのが不思議なバランスですね。俳優がどんなふう挑戦するのか興味はあります。

『象徴の詩人』

やなぎ 私には古典的すぎて物足りなかった。引用が多い。‘駅で誰か待っている’という設定など引用のところは注釈があって、それがとても多い。

三浦 色々勉強しているなという印象。ただ設定も常套だし台詞が身体化されていないのが残

年。もうちょっと書けるんじゃないの？

鳴海 ハイナー・ミュラーの『ハムレットマシーン』や、ベケットにもあるスタイル‘発話する主体を明示しない’という手法に、好みや憧れが表れている印象。『ハムレットマシーン』ほど加害的ではないし、ベケットほどの空疎や透明感もないので、それらとは別の主体の隠ぺいの効果があるのかなと期待はしました。ただ、引用テキストに対して何かしらの態度は感じられず、配置しているだけという印象が強かったです。オリジナルのテキストを増やしたものを読みたいと思いました。ここまで(オリジナル部分が)短いと評価しにくい。ある分量を必要とするであろうドラマトゥルギーに届いていないのがもったいない。

やなぎ 他の作品も見てみたいですね。他のものこういう書き方なのかな。

三浦 この作品、恋愛を入れるべきだった気がする。それでずいぶん変わったんじゃないかな…。つまりこういうテキストには色気が欲しいな、と。

やなぎ どうやってオリジナルと引用を混ぜることができるんでしょうね。

三浦 ここまで細かく引用を書かなくても良いくらいだと思う。この‘引用を書く’ことが目的になってしまっている気がする。

鳴海 「こんなに知っているんですよ」と顕示したいように誤解も生みかねないですね。

白神 誰に向けているのだろうか？と考えた。「これだけ書いてますよ」と見せられて「で、あなたは何？」と思ってしまう。人工庭園のところだけは生々しい。

『すべては原子で満ちている』

やなぎ この作品は、複数の作者がいるということ？

鳴海 集団としては小野さん・中澤さんらのグループで、チームで集団創作することが多い人たちなので、その中で積み上げられたテキストということでは。

三浦 僕は読んでいて面白かった。ただ、短い。もっと本当は話があるんじゃないか、という物足りなさを感じた。ナンセンスな短いものが重なっていく、という点では『かる～いふとん』と似ていて、この入射角で入ることは応援したいんだけど。台詞に身体性があるって読みやすい、ということが評価されるべきことなのではなくて、それを土台にして次にどこに行けるのか、という事を見たいわけ。集団創作だから纏まってないのも面白い。誰かが態度を決めれば決まるけど敢えて決めていない、ともいえる。

白神 演出の二人はダンサー、パフォーマーでもあるので、出演者の身体や配置、間など補填されているものがあるとは思う。ということを見ると、戯曲という括りだけでは評価し難い…という気持ちも。

鳴海 テキストが結果でありつつも、上演に関してはあくまで材料で、この材料を使ってパフォーマンスする、というのなら、テキストとしては補助線や充填剤が欲しいですね。言語的なずらしを随所に仕掛けていて、タイポグリセミアのように、文法とか助詞とかが間違っているも読めてしまう、理解できてしまうような、効果も面白いです。

白神 他の演出家が上演したらどうなるか、という可能性は感じる。

やなぎ 変化球ではありますね…。

『ねー』

三浦 ロジカルで良かったですね。ちょっと固いかな…という印象もあったけどそれほどネガティブではない。書く人物にもう少し具体性がほしかった、勢いというか、情熱がもう少し欲しいと思った。

やなぎ 淡々としていますよね。けれど内側に強固なものを感じた。特にラスト。時事問題を扱っているようで、神話にも接続していて、面白い。

白神 やな話だなと思いつつも読み進めさせる不思議さがある。引っ張られるような。

鳴海 書きたいことに向き合って、よくこの分量にまとめているなと思いました。書きたいこと、つまり作者の影が言葉の後ろにちらついている気もしますが。短い風景が細切れに積み重なっている手法の効果が効いていない印象だったので、各シーンをもう少し長く再構成できる余地を感じました。長いスパンでシーンを体感できた方が、書きたいことをより遠くまで表現できそうですね。

白神 寺山修司の紙芝居(『大人の紙芝居 まぼろし劇場』)みたい。

鳴海 風景的な作品ですね。

『うまく落ちる練習』

やなぎ 実際に展示をやっている人ですね。

三浦 アイディアはOK。台詞がいっぱいあってよかった。ただ、台詞を読んでいくと、狭さがぬぐえない。「亡霊とは何か」という部分に具体性がある気がして、そこを面白く考えながら読んだ。

鳴海 コンセプトで挑戦したい、役が固定化されていない(俳優と振られている役が固定化されていない)から起きることをテキストで表現しようとしているのは、とても可能性を感じます。身体的な指示書も、ある人の行為を他の人が真似して繰り返すことで、行為が劣化していくという視点に、人間社会を表象する方法としてセンスの良さを感じました。ただ、置かれている言葉の恣意性をどう評価するかに悩みます。

白神 配置とかアイディアが面白い。俳優の交換可能性とか、その構造自体をやりたい、という感じはわかる。体験したい。

やなぎ 考えることに時間をかけているのではないかと思います。歌舞伎町など、その磁場から力をもっていて、これは必然だという作品にたいして自負と自信を感じます。良い意味で完成度が高い。

『入墨淘汰』

やなぎ 若い女性が書いているのがすごい。

三浦 おもしろかったよ、でもアングラ過ぎない？ 良い意味の自由さがあるのに、「ああ、これねー」と思われちゃうのがもったいない。

白神 唐十郎みたい。はじめ年配の方が書いたのかと思った！

やなぎ 相当観て、読んでないとかけないとおもう。

鳴海 唐さん、つかこうへいさん、寺山修司あたりをかなり読みこんでいる印象でした。身体性をもって書いている感じがありますね。ただ、影響が見えすぎるのはもったいない。

白神 結構面白かった。

鳴海 テキストに力があって、痛快でした。

やなぎ アングラの力を継承している。それは真似とかではなく、どうしようもない血脈みないなものだし、これで良いと思います。

『停留所』

三浦 良くかけているとは思う。ナンセンス、不条理というもの、別役(実)さんの文体が何からできてるのか、という事を考えながら読んだ。作者もある程度そこから離れて書いている上で読ませられたという事は凄いと思う。でもそこからはみ出して欲しいという欲求が出ちゃう。範囲内のことだけ書けているというのはもったいないな…と。比べると、『入墨淘汰』はそれを超えていく自由さがある。

鳴海 安部公房とは違う不条理、別役さん独特の論理のすり替え、すれ違い、ずれた的な、それを作者なりに消化して、書いたんだなという印象を受けました。しかし別役さんの範疇は超えていないのが惜しい。作者自身がナンセンスを使ってどこに行きたいのかが見えにくい。血や民族、男と女とか、そういう重要なモチーフは出てきてるんですけど、それらに対して、この作者自身独特のナンセンスの扱いを見たかったなと思いました。

三浦 良くかけているとは思う。ある完成度はある、と思った。

やなぎ まったく章立てなしで続くんですね。

白神 前半で「別役さんほいな」と思ったんだけど、面白かった。

三浦 タイトルに生真面目さが出ている。敢えてタイトルも『受付』の方が面白い。

白神 停留所だと普通になっちゃう。

「Qu'est-ce que c'est que moi?」

鳴海 シークエンスを音、物語、関係性などに明確に分けていますね。「物語が嫌い」と言いながらも、ある点では物語に憧れるというのは、個人的にとっても共感します。ブレイトの異化のように、没入や移入を回避する注釈を入れながら書く手法は面白いですね。ただ、コンセプトは良いのですが、それが上演ではなく、テキストにどこまで反映されているのかという点に疑問は残りました。「良い物語」に憧れているわけではないのはよくわかりますが、技量もセンスもあるので、嫌いな物語と、憧れた物語の差分をもっと明確にできたのかな、とも。

やなぎ 小劇場のコメディにありがちな感じになったのがもったいないです。

三浦 台詞自体はある種のテンションが維持されていて、面白く読めた。でも「どういう人間が発

語するんだろう」と考えると最初の設定止まりで、完成しているかという疑問が残る。作者の中でも解決しようとしている態度は評価できる。問題は、「物語は？」となった時に、広げすぎたんじゃないかな。收拾しきれてない。緊張感をもって書いているとは思った。

白神 読むのが大変だった。

やなぎ 最後の音楽が分からなかったですね。

三浦 まあ、ベケットが『Quad』書いた時だって。頭でっかちだと言われたかもしれないしね…。

進行 これまでのお話合いで『ねー』、『うまく落ちる練習』『入墨淘汰』に票が集まっています。他はいかがでしょうか。

やなぎ 『異聞・シーシュポスの神話』はこの若さで良く書けている。抽象的な行為まで書いていて面白い。全然まだ足りないところはあるけど。ラストシーンの勢いに惚れましたね。

白神 好みかもしれないけど、『かる～いふとん』。足りない部分もありつつ、軽いストーリーの中に、シビアなことが入っていて飾ってない素の感じがあって。そういう人もいても良いかなと。あと別役実が好きなので『停留所』の魅力も捨てがたい。

鳴海 『すべては原子で満ちている』は上演のための素材のテキストで、潜在的な身体性があるテキストとして議論できますね。『Qu'est-ce que c'est que moi?』は物語の構造や姿形について議論が広がりそうです。

三浦 『ねー』は内容そのものについて、『上手く落ちる練習』はコンセプトについて、『入墨淘汰』はアングラ回帰と若い人の勢いに期待したいという感じかな。あとは集団創作の『すべては原子で満ちている』か。集団創作(のテキスト)はそれほど珍しくは無い。

鳴海 『すべては原子で満ちている』はもう少し長ければ、とは感じます。『かる～い布団』は文章量はありますね。『異聞・シーシュポスの神話』は良いとは思いますが、あくまでキャリア的相対性の上です。

やなぎ 中高生の彼ら・彼女たちは過酷な環境でサバイバルしていますから、その環境の中でこれだけ健全なものが出てくると、未来に希望が見えます。

三浦 『かる～い布団』はあくまでコント。コントが出来る俳優が有能であるという事はどういう事か、も話すことができる。『すべては原子で満ちている』は集団創作＝作者とは誰なのかという話になる。ちょっとコンセプト倒れ気味な気がする。

やなぎ どことも連絡せず自己完結しているコントや、集団制作も匿名性もありだと思います。ただ舞台では、個人と個人が直に顔つき合わせてやるものなので、結局は、開いて、つながって、贈与し合うものになっていくのでしょうね。

白神 集団創作の作り方としては、『すべては原子で満ちている』はダンスと関係しているな、とか、いろんな人がやったら面白いかも、という気持ちも。

鳴海 (集団創作の場合)俳優のプライベート・エピソードはどこに帰属するのかという議論ができますね。ダンスでも、振付家でも編集というポジションで、集団創作する人もいて、作者とは誰かという問題につながります。にしても短すぎる気もします…。非常に興味深い議題ではあるんですけど。

以上のような議論を経て、下記4作品が二次審査通過作品となりました。

異聞・シーシュポスの神話(平賀美咲) 入墨淘汰(野滝希) うまく落ちる練習(三野新) ねー(小野晃太郎)

上記5作品の中から1月5日最終審査会により大賞・特別賞受賞作を決定します。

作品はウェブサイト、審査会会場等でご覧いただけます。



2018年第18回AAF戯曲賞公開審査会の様子